

令和6年度 信濃教育会全県研究大会 阿南町立富草小学校 開催要項

富草小学校 テーマ

「子どもの思いから問いが生まれ、学びが深まる総合的な学習」

1 期 日 令和6年 10月17日(木)

2 場 所 阿南町立富草小学校

3 共同研究者 宮下昭夫(信州大学 教育学部附属松本地区統括長)

4 日 程

(1)受付(体育館入口) 12:40~12:55

(2)開会式(体育館) 13:00~13:10

- ・主催者挨拶 信濃教育会 事務局次長 原 文章
- ・学校長挨拶 阿南町立富草小学校 学校長 宮澤昭二

(3)研究発表(体育館) 13:10~13:20

- ・これまでの子どものあゆみ 富草小学校 研究主任 北澤智之

(4)授業公開(多目的スペース) 13:30~14:15

- ・単元名「4年生のオリジナル防災バッグを作ろう！」
- ・4年生 男子5名 女子2名 計7名 授業者 野口陸王

(5)授業研究会(体育館) 14:25~15:35

(6)宮下昭夫先生講演(体育館) 15:40~16:30

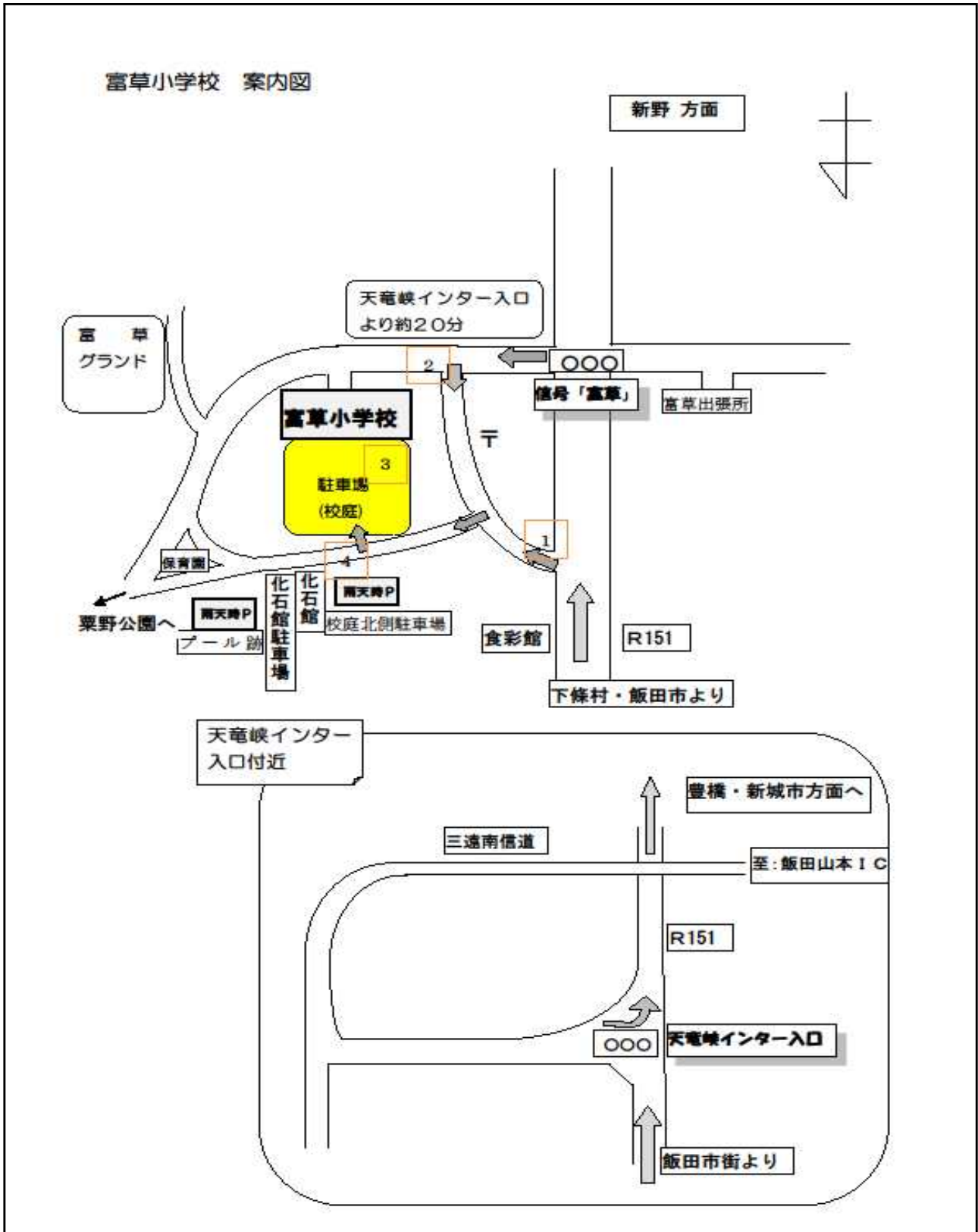
- ・演題「探究的な学びと教師の在り様」

(7)閉会式(体育館) 16:30~16:40

- ・学校長挨拶 阿南町立富草小学校 学校長 宮澤昭二

5 連絡

- (1) 本要項と資料は各自印刷してご持参ください。当日資料は受付にて配布します。
- (2) 受付は体育館玄関です。
- (3) 全体会は体育館となります。暖かい服装等、ご準備をお願いします。
- (4) 欠席の場合は、本校までご連絡ください。(0260 - 22 - 2506)
- (5) 駐車場は校庭をご利用下さい。雨天時は、校庭北側駐車場をご利用下さい。



6 研究発表

(1) 研究テーマ 子どもの思いから問いが生まれ、学びが深まる総合的な学習

(2) テーマ設定について

本校は標高615m、南には天竜川が流れ四方を山に囲まれた自然豊かな環境に建つ山間地校（準へき地）である。全校児童は53名、「ひとりひとりがかがやく富草小」の学校教育目標の下、子ども達は、めあてをもって粘り強く取り組む姿が多く見られている。また、地域の方々の学校教育に寄せる思いは強く、地域講師を招いて以下のような教育活動に取り組んでいる。

- ・防災フェス（全校） ・三紀層大根づくり（全校）
- ・富草寮（救護施設）との交流（3年） ・赤そばづくり（4年）
- ・米づくり（5年） ・富草太鼓（6年）

これらの活動は、地域の方々の献身的な支援によって支えられ、子どもたちの知・徳・体の調和的な育ちや郷土を愛する心の涵養につながっている。

一方、本校のカリキュラムに位置付きながらも、これからの社会を生きる子どもたちに必要な問題発見力や問題解決力、コミュニケーション力や表現力などの資質能力を養う探究的な学習にはなり得ていないという現状もあり、私たち教師の大きな課題でもある。引き継がれてきた活動はややもすると体験することが目的となり、体験あって学びなしといった状況に陥ることも危惧されるところである。

そこで、本研究グループでは、社会全体に防災への関心が高まっている現状の中で、平成元年度から本校で取り組まれてきた「防災フェス」に関係づけ、「防災」をテーマとした探究的な学びが生まれる単元を立ち上げたいと考えた。そして、研究テーマを「子どもの思いから問いが生まれ学びを深めていく総合的な学習」として学ぶことの楽しさや醍醐味を実感することで連続的な学びを生み出し、未来に生きる子どもたちの生きる力を養いたいと考え、本研究テーマを設定し、学校目標「ひとりひとりがかがやく富草小」の具現に迫りたいと考える。

(3) 題材設定について

富草小学校には「防災フェス」と呼ばれる地域ぐるみで行う独自の行事があるほど、地域の防災への関心が高い。毎年4年生は総合的な学習の時間の題材に防災を取り上げて学習を行っている。子どもたちにとっても4年生になったら防災学習をするという認識があり、「今年は防災についてやるんでしょ」と1学期が始まった頃に当たり前のように話していた。その言葉を聞いた私は、「この防災学習は果たして子どもたちの生きる力につながっていくのだろうか」という疑問を持ち、意欲的な取り組みになるよう防災学習を子どもたちとの出会いの場から単元構成を考えていきたいと思った。一月の能登半島地震では多くの方が被災し、避難所での生活を余儀なくされた。近い将来南海トラフ大地震が起こり、長野県もその被害が予想されている。そのときに子どもたちの生きる力として、この防災学習が役立つようにしたい。そのためにも子どもたちがこの防災学習を自分事と捉えて主体的に取り組める活動にしていくことが私にとっての課題となった。私は子どもたちの活動を見守り、子どもたち自身で関わり合っ

(4) 研究内容

①防災倉庫との出会い

普段何気なく見過ごしてしまいそうな防災倉庫という存在。そこに注目して今回の学習が始まった。実際に倉庫周りを見たり触ったりして中身の予想や何のためにある倉庫かなど気になることを書き出す活動をした。A児やB児が阿南町のマークが書かれていることに気づき、町が関わっていることを予想し役場に問い合わせることとした。防災倉庫周りに



については「どうやって入るのか」「鍵はどこにあるのか」「なぜそんなに頑丈なのか」「中に何が入っているのか」「災害のときどうするのか」など聞きたいことは山ほどあり、全員の児童が電話をかける役に立候補するほど積極的な姿を見せた。子どもたちの興味を刺激するよいスタートとなった。

実際に電話をかけるのはA児になった。電話での問い合わせ文は全員で考えることになり、各自意欲的に会話文作りに取り組んだ。普段の国語の授業で文を書くとなると苦手意識がありなかなか進まないC児であったが、自主学习ノートに会話文をいくつも考えて書いている姿は今までに見たことのないほど夢中に取り組んでいる様子であった。

役場と連絡を取り合い、5月の初めに防災倉庫の見学をした。子ども達が予想した中身は、食料やおもちゃ、娯楽品などの意見が多かった。しかし、防災倉庫の中を見ても食料は入っておらず、子どもたちは驚きの表情を見せた。中には、予想にはなかった携帯トイレや発電機、毛布などが入っていた。それを見たA児は「避難所の生活を知りたい」と防災グッズとのつながりを考える様子があった。また、「食料はどこに保存されているのか知りたい」と予想した物についての答えを調べたいと意欲をもった。



教室に戻ってから防災倉庫に入っていた物を整理した。あらためて考えると災害時に必要な物ばかりで、防災グッズは子どもたちの探究心をくすぐるものとなっていた。予想していた食料については、町の防災課の熊谷さんに尋ねた。すると、水や食料は防災倉庫にはなく、学校近くの富草出張所という施設にあることと教えていただいた。次回は電話をして出張所見学に向かうこととした。今回子ども達の感想から、防災グッズへの関心が高まったことや、食料がなかったことへの驚きの大きさを知ることができた。

② 2つ目の防災倉庫見学

出張所の防災倉庫を見学した。子どもたちは以前から予想していた食料が見られることもあり、倉庫にはどんな食料が入っているのか期待をふくらませていた。そこには、水を入れることで食べられる「アルファ化米」や保存期間が長くそのまま食べられる「レトルトパン」があって、特別な食べ物であると感じた子どもたちは驚いていた。



熊谷さんから、「出張所には100人が1日3食で3日間生きることのできる量しか置いていない。」という話を聞くと、E児は備蓄されている食料の量について疑問を抱いた。そして、E児が「出張所には何人の方が避難するのですか。」と質問すると、「富草地域の440名の方が避難してくる想定です。」と熊谷さんの答えが返ってきた。倉庫に入った時には「たくさんの食料があるな」という第一印象であったが、熊谷さんからの話を伺い、見学が終わったときには「この食料の中には、自分の分はあるのかな」という疑問と心配に変わっていた。

次時は「100人分」という数字に着目して学習を計画した。この「100人分」を多いと感じていたのが1名、少ないと感じていたのが6名だった。

T:「100人という数字に自分は入っていると思う？」

S: 全員がうなづく

T:「富草小学校の全校生徒は入っていると思う？」

S: 同じくうなづいた。

T:「全校のみんなの家族は入っていると思う？」

S: 同じくうなづいた。

C:「全校は53人だから、そのお父さんお母さんも入れると100人じゃ足りない気がする。」

「100人が3日間生きることのできる量」は見た目では多かったようである、しかし、少なく感じ始めたC児は、実際の避難所生活を想像することができていたのかもしれない。避難所生活を自分事として捉えることで量に対する不安を抱き、問題意識が芽生えたのではないかと私は感じ取った。子ども達は、100人分の備えで足りるのかどうか確かめるために、避難所に来る人をアンケートを使って調べてみることにした。

アンケート結果から子どもたちなりに2つの疑問について答えを出した。

1つ目の「100人分の食料に自分たちの分は入っているのか」という疑問については、アンケート総数105枚中、出張所と小学校に避難をすると答えた人が85人だったことから「自分たちの分も入っている」という答えを出した。

4年生防災アンケート
5年お父さん・お母さん
どちらかに○をして下さい。

4年生では、親含の防災について調べたいです。このアンケートをとります。ご協力よろしくおねがいいたします。

① 災害が起きた時のみんなの所は、知、2リマオカ?

② 災害が起きたとき、どこに避難しますか?
 富草小学校 富草出張所 その他 自宅

③ 必要な物資をどこで調達しますか?
④ 必要な物資をどこで調達しますか? ボツに書いて下さい。

非常持出し
水、マスク、傘、ペットボトル、食料
懐中電灯、衛生用品、靴
携帯ラジオ、簡易トイレ
下着、着替え

アンケートをお借りします。ご協力ありがとうございました。6月12日(日)までにおかしてください。

2つ目の「100人が1日3食で3日間の食料は足りるのか」という疑問については、「足りない」という答えを出した。それは、85人と自分たち7人を合わせた92人でも4日間しかもたない量の食料では少ないと感じたからである。アンケート結果を元にした話し合いで、一月に発生した能登半島大地震の話を引き合いに出す児童もいた。F児は「それだったら自分の家から持ってくるしかないね。」と話した。F児は話し合いの中で自分自身が避難所生活の対象者であることを実感するとともに、初めて食糧の少なさを自分事として捉えて不安や危機感を感じている様子が見られた。

③避難所での生活を体験しよう

防災グッズへの興味関心や実際の生活を体験してみたいという思いから、泊を伴った避難所体験を行うことにした。避難所体験の準備を始め、各自で避難所に持っていくものを考えた。持ち物を準備する上で考慮したことは、①防災倉庫にあるものは使える ②電気水道ガスは使えない ③歩いて学校に来るため自分で持ってくること である。各自持ち物を考えた後クラス全体で話し合い、友だちの意見から必要だと考えたものを書き足した。

E：「Cくんは歯磨きどうするの？防災倉庫には歯ブラシなかったよ。」

A：「普段使っていて気にもしてなかった。それなら歯磨き粉もいるし口をゆすぐために水を入れる紙コップも必要じゃない？」

E：「確かに！口をゆすぐための紙コップも必要になってくるね。」

S：「結構持っていくものがありそうだなあ」

S：「防災倉庫にこれはあったから持っていかなくてもいいんじゃない？」

子ども達は、話し合いの中で避難所に持っていくものを再考した。歯ブラシやティッシュなど生活必需品で意外なものを落としていることに驚き、自分の荷物について見返す様子であった。最初は家庭用ゲーム機をもっていこうとしていた児童も、生活している場面を想像して具体的に考えることで自然と選択肢から外れていった。体験準備の話し合いを終えて振り返りをすると「災害にあった時の気持ちを知りたい」「本当に準備するものはこれだけで足りるのか知りたい」と学習カードに書いた。子どもたちの姿からは、避難所体験への不安も感じたが避難所生活をより快適にしたいという思いが感じ取られた。

夏休みに入る直前の休日を利用して、避難所体験を行った。避難所体験の中でトイレの置き場所について議論する場面があった。仮設トイレはどこにでも置くことができる簡易さがある反面、トイレという性質を考える必要があり置き場所には議論の余地があった。そこで2グループに分かれ、それぞれが置き場所を考えたとえ意見を折り合わせることにした。Aグループは話し合いの結果、体育館横に設置することを提案した。理由としては、

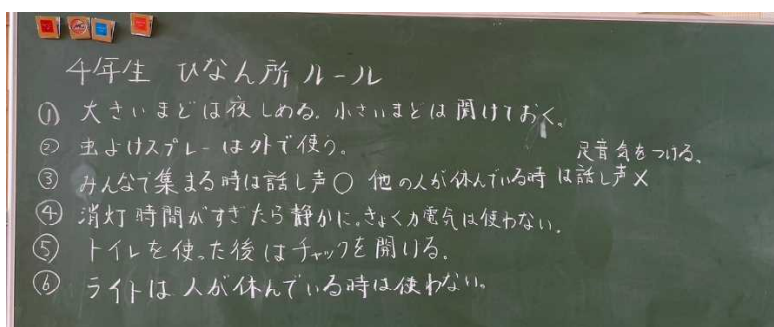


「近い」「雨を防げる」「靴を履き替える必要がない」という3点が挙げられた。一方Bグループは、体育

館から少し離れた屋根のある場所を提案した。理由は、「においが気にならない」「雨を防げる」「音が気にならない」という3点だった。意見は対立し、互いに設置場所の良い部分だけを主張し、問題点を見つけて言い合う話し合いになってしまった。設置場所が決まらず、時間がたっていく中でC児が「そろそろトイレしたくなってきちゃった。」と口にすると、話し合いがまとまる方向に進んだ。AグループのB児が「確かに臭いが気になるから近すぎるのもよくないね。」と話すと、BグループのE児が「近いことにも良さがあるから、私たちの考えた場所よりも体育館に近づければよさそうだね。」と返し、互いの意見を取り入れ始めてトイレの設置場所を決めることができた。普段は話し合いに折り合いをつけることが苦手な子ども達だが、今はトイレをいち早く設置することが自分たちの避難所での生活をよりよくするために必要なことだと気づき、互いに折り合いをつけることを選んだ。これも避難所で生活するのは自分自身であると感じて自分事として捉えている姿だったと言える。

避難所体験でのルールを決めた。生活ルールは児童が問題だと感じた時に相談するという約束にした。体験前に予想できる範囲で考えたルールは、話し声の大きさや窓の開け閉めについてだった。

トイレを設置し、テントをベッドを組み立てて、避難所生活の準備が整ったあたりで、子ども達は各々のテントに入り時間を過ごしていた。話し声には十分気をつけていた様子だったが、A児が不機嫌そうな顔をして私のところに相談をしに来た。話を聞くと、「みんなの足音が響いて思うように休めない。」と話してくれた。すぐさま子どもたちを集めてA児の訴えを伝えた。するとB児は「話し声に気がついてはいたけど、音が出ちゃっていたなんて思わなかった。」と話し、足音に気をつけるというルールを追加することとした。さらに消灯時間を過ぎてからの訴えもあった。消灯時間を過ぎた体育館は思った以上に暗く、F児はテント内で明かりを使用することで、周りへ漏れる光が気になって眠ることができないという内容を話した。そこで「ライトは人が休んでいるときは使わない」というルールをさらに追加した。きっとA児やF児は、体験することでしか得られない不快感や不便さを知り、それを周りに共有することが必要だと感じたのだろう。みんなで生活する上でのルールの必要性を感じ、気兼ねなく全体へ伝えることができたのだと思う。体験したからこそ感じた思いがあり、伝える必要性や使命感などが生まれ、主体的な取り組みにつながっていると感じた。



(5) これまでの実践を振り返りの成果

① 見守る支援のための子どもの学び

子どもたちの主体性を重んじて教師の出を極力少なくするというのが私の研究課題だったが、実践を通して少しずつ見えてきたことがある。子どもは目的がはっきりとしていれば、手段として身の回りの物を活用したり必要に応じて自ら友達と交流したりするのである。だとすれば教師は「こうなさい」

と伝えるのではなく、目的をはっきりさせた上でいくつもの手段を用意しておく必要がある。また、話し合いのポイントや具体的な状況を伝えておくことで、どんなときに話し合いをするべきなのかを子どもたちが判断できるようになる。そうすると子どもたちは「やらされている」のではなく、「自分たちが学習を進めている」という思いを持ち始めるのである。そこで大きく方向を見失わないように机間巡視や揺さぶり、問い返しを適宜行うことが見守る支援につながることに気づいた。

②拡散から収束へ

今回総合的な学習の時間では拡散と収束を連続させることが重要だと感じた。防災倉庫との出会いや避難所体験という活動は子どもの興味関心を一気に引き出し、次にやりたいことや調べたいことが山のように出てくる。そこで子どもの興味関心に合わせてどんどん広げてしまうと、子どもだけでなく教師も何をしたら良いのかははっきりしなくなってしまう。そうすると子どもたちは一気に興味関心がそれ、教師はどう展開していけば良いのか想像ができなくなる。そのため、拡散した時には一度まとめあげる収束が必要になってくる。すると子どもたちは自分の行ってきた活動に自信を持ち、より精力的に次の活動へと向かうようになる。総合は話題が尽きず次から次へと興味が出てきてしまうが、一度立ち止まって焦点化した上で学習を進めていく必要があることを感じた。

③防災という教材の入り込みやすさ

今回「防災」という教材に初めて触れて気づいたことがある。何年間の内に起こると言われている南海トラフ大地震が子どもたちにリアリティを感じさせ、誰もが自分事としてとらえることができるという点である。子どもたちは避難所体験を通して普段考えることの無かった避難所の苦勞を味わった。「このままでは自分だけでなく大切な人が過酷な避難所生活を送らなければいけない」という必死さがうまれ、それが彼らを突き動かしたようにも感じる。そして自分以外の地域の人や学校の友達を苦しい気持ちにさせたくないという思いが「伝えたい」に至り、予想される避難所での生活をもっと豊かにするための「もっとこうしたらいい」という提案をそれぞれが考え発信していくことにつながった。もし本当に災害が起きたら、と考える始めるとできることがたくさんあるのも防災という教材の可能性であるとも感じた。

(6) これからの私

この半年間、悩みながら総合的な学習の時間に取り組んできた。その中で子どもが輝く瞬間はいくつも思い浮かぶ。普段の教科学習で思うように話せない児童が自信をもって自分の意見を話す姿や、書くことに苦手意識を持つ児童が段階を経て自分の思いを言葉にして書き留める姿。主体的になれるからのこその姿で、これが総合的な学習の時間にある良さだと感じる。今回の防災学習では、題材との出会わせ方や避難所体験など授業の準備に時間がかかったことは確かである。しかし、そこには価値があり自信を持てた児童がいる。それだけでも私の努力は報われたのだと感じている。これからも引き続き、子どもたちが防災学習に向き合い、最後の活動では達成感を持って終えることができるよう手立てを用意し、見守る姿勢を大事にして学習を展開していきたい。

(7) 本時案

①単元名「4年生のオリジナル防災バッグを作ろう！」

4年生 男子5名 女子2名 計7名 授業者 野口陸王

②主眼「防災バッグに入れたいグッズを考えている子どもたちが、グッズを選んだ理由を体験から話したり、友達のグッズに対する思いを知ったりすることを通して防災バッグに本当に必要だと思った物を改めて考え選ぶことができる。」

③本時の位置

第1時	避難所体験での写真を基にそのときの気持ちを言葉にした。
第2時	避難所生活をより快適にするため、地域や学校に伝えたいことをはっきりとさせた。
第3時	避難所体験をいかし、「もっとこうしたらいい」を考えたミニポスターを完成させた。
第4時	販売されている防災バッグを調べ、自分たちの避難所生活に必要なと思う物を考えた。
第5時・本時	自分の防災バッグに入れたいと思う物を理由と共に提案し、改めて中身を考える。
第6時	防災バッグの中身に選んだ物についての理由や自分なりの思いをまとめる。
第7時	実物を準備したり、スライドを考えたりして、発表の工夫を考える。
第8時	思いが伝わるような発表にするために、友達と聞き合い練習する。
第9時	お家の人や地域の人に向けて、役立つオリジナル防災バッグを発表する。

④指導上の留意点

- ・意見交換の中で、理由がイメージしづらい場合は具体的な場面を教師から出し、理由と場面を結びつけて想起しやすいよう手助けする。
- ・話が逸れてしまう児童に対して話の趣旨を再確認し、意見交換に気持ちが向くように対応する。

⑤展開

展開	学習活動	予想される児童の姿	○支援 ◆評価	時間
はじめ	1 前時の振り返りから学習問題を確認し、本時の学習に見通しを持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・買った防災バッグには欲しいものが入っていなかったよ。 ・本当に必要な物を入れて、もっと役立つ防災バッグを作りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○前時の振り返りから、子どもたちの中で問題となっている部分をはっきりとさせる。 	3
	2 学習課題を立て、対話の中で意見交換のやり方を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 学習問題 どうすれば本当に必要な防災バッグを完成させることができるだろう。 ・自分の防災バッグに入れたい物を5つ考えてきたよ。 ・自分だけで決めるのは不安だから、友達の意見も聞いて考えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○各自の提案を5つ用意しておく。 ○友達の意見を参考にすることの良さを取り上げ、学習課題を設定する。 	5

		<ul style="list-style-type: none"> ・選んだ理由をちゃんと伝えて、みんなに分かってもらえるように提案できるかな。 ・もし提案する物が同じだったら、一緒に発表すればいいんじゃないかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○スムーズに進めるために意見交換のやり方を確認する。 ○話し合いの中で必要に応じて補う。 	
な か	3 実物を見せながら、自分が必要だと思った物を提案する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくが必要だと思ったのは紙コップなんだけど、理由を分かってくれるかな。 ・紙コップがなかったとき、他の人も困って、〇〇さんに貰っていたな。 ・やっぱり紙コップは、歯磨きや水を飲むときにあった方がいいよね。 ・ゲーム機を持って行くという提案も暇な時間が多かったからいいと思うな。 ・確かにゲーム機だと電気が使えなくなるからトランプみたいな方がいいかもしれない。 ・ウノやトランプとか遊び道具は考えていなかったけど、あるといいなあ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○発表者から「理由は何でしょう。」と投げかけるようにし、聞き手が理由を聞いてみたくなるようにする。 ○検討課題になりそうな点を投げかけ、避難所の状況を想像して考えていくようにする。 ○書くことはせず、聞くことに集中して、話し合いが活発になるようにする。 	20
	4 市販の防災バッグの中身に子どもたちの考えた必要な物を加え、本当に必要な防災バッグの中身を改めて選ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・提案した物はどれも必要だと思うけど、全部持って行くのは大変だ。 ・〇〇さんが言ったとおりで、懐中電灯があって良かったな。体育館の中はとても暗かったし、トイレに行くのも明かりが欠かせなかったな。 ・〇〇さんが言っていたカッターは必要だと思うなあ。避難所体験を思い出すとテントを段ボールから出すとき大変だったな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○検討課題になりそうな点を投げかけ、避難所の状況を想像して考えていくようにする。 ○書くことはせず、聞くことに集中して、話し合いが活発になるようにする。 ○バッグに入ることを想定して、改めて一覧表を使って、本当に必要だと思う物を選ぶようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>◆評価 友達の意見を参考にしながら防災バッグの中身について改めて考えている。</p> </div>	12
お わ り	5 次時の見通しを持ち、振り返りを記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所のことを思い出しながら考えると、本当に必要な物かどうかについてよく考えられたなあ。 ・防災バッグの中身がどうして必要なかを教えてあげれば忘れずに持ってきてくれそうだからちゃんと伝えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実際の体験が理由となっていたことを取り上げ、経験の大切さを気づかせる。 ○地域の方などに必要な情報であることを押さえ、役割の大きさを感じさせ次に繋げる。 	5

⑥授業の観点

1. これまでの学習や体験を振り返り、友と関わり合いながら、防災バッグを考えるという活動を自分事と捉えて主体的に取り組める活動になっていたか。
2. 子どもたち自身で関わり合っ学ぶことができるような教師の立ち位置や場の設定、声かけは適切だったか。